



古代印度の家族制度

宮澤 一 氏



本論に於ては、原始仏教々団の社会的背景に対する一考察として、古代印度人の家族制度及び家族倫理について述べんとするものである。従つて研究の才一資料としてマヌ法典(中野義照訳、元五刊)を中心として展開する。マヌ法典は中野氏によれば(中野氏訳マヌ法典序四頁)、西記前後二世紀の大作とせられており、内容の上からは前代諸家の説を綜合大成したものであるから、資料としては、大体に於て原始仏教時代に一致する。

先づ古代印度に於けるインド・アーリアン人の家族は未分家族即ち非分割家族であつて集合家族や家共同体とほゞ同じ内容のものである。その成員は家長妻子孫の三代に互り、祖先と住居と食事と財産とを共にする傍係親族を含む大家族組織である。印度に於て、氏族(Kula)と云う語は、それ自体家族をも意味している。従つて家族(Kula)は親子兄弟のみならず、妻子と親族と朋友と近親の群とかれにたよつて生活するもの共(叔卑傭人)全てを含んでいる。

而し仏教がガンジス河の流域に興起した時には、アーリア人のみならず、ドラヴィタ人やコラリア人などはそれぞれの家族制度を成立せしめ、それぞれの伝統を維持していたであろうと考える。アーリア人が侵入して未だときは、彼等ドラヴィタ人は大河の流域、或は平原の諸々に棲息して、部落共同体による集團生活をいとなみ定住していた。彼等の家族は一妻多夫によ

る母系制である。従つて女性が家族内に於て、重要視せらるべき大きな地位をしめていたのである。この母系社会たるドラヴィタ文化が、新しい征服者である父系社会のアーリア文化に大きな影響を与えていることは注目しなければならない。例えば「マハーバラタ」の中で婿えらびで獲得した王女を勝利者の兄弟五人の「共通の妻」としたことが記されており、これは勿論「多妻婚」を意味している。又後世のインド人一般の命名法にも影響を及ぼしている。

当時再生族たるアーリアン人の一生は四つの生活期に分れ、一定の年令に達すれば師家に入住して学習し(梵行期 *Brahmacārin*)、次いで結婚して家長としての義務を果し(家長期、

Grhastha)、然る後森林に隠棲し苦行をし(林棲期 *Vanaprastha*)、終りに雲水の生活をしてゐた(遊行期 *Sannyāsin*)。結婚して一家をなすと、男子は家長期に入り、家庭の主宰者として無数の祭事を行わねばならなかつた。マヌ法典には次の如く規定している。「家主は結婚時に點じた聖火を以て儀軌に従つて家庭的祭事及び五大祭事を執行すべく、またそれを以つて日々その調理をもなすべきである」。(マヌ三、六七、五九頁) 五大祭事とはシャタパタ梵書(三、五、六一)によれば、家長の日常の義務として所謂五種の祭事、即ち神祭 (*Devayajña*)、梵祭 (*Brahmayajña*)、祖先祭 (*Pitrayajña*)、萬靈祭 (*Bhūtarayajña*)、人祭 (*Manvayajña*) である。家庭経(ガウタマ家庭経二、二四)(アシニワラーマナ家庭経三、一)は特にこれを日常の五大祭 (*Pāṇca mahā yajñāḥ*) と名づけて凡て根本的なものと見做した。即ち家長は家庭的宗教の祭主たる地位にあつたのである。「この七靈祭、有名なもので祖靈祭と名づけられ新月の日に挙行せられる。これに熱心なる者には伝承的儀軌に従つて挙行せられる亡靈祭の果報は常にもたらされる」(マヌ三、三三、六七頁)と、竈の火が祖先の靈の象徴として祭られ、毎月の親月の際には祖靈祭 (*Śrāddha*) が行なわれた

のである。家長は族中最年長の男子であつて、一族の財産の管理の外、族内のすべての事件を処理する権限を与えられている。家の相続は祭主たる地位の相続と不可分の関係にあつた。人は子によりて世界を征服し、子の子によつて無辺界を享ける。次に子の孫によつて太陽の右界を獲得するのである。(マヌ九・三七、三五七頁)「長子誕生の利耶には人は子の父となり、祖霊への債務を辨済する。故にその子は全財産を相続する資格を有する」(マヌ九・百六二、三五三頁)彼等は子によりて自己の肉体が未来に相続するのみでなく、死後の霊魂も子の供養によりて救はれると信じたのである。摩訶婆羅多には、子孫のないため祭祠を行うものがなく、賊野の穴の中に倒息の(Avalambana) 苦を受けていたバラモンのあつた事を記している(池田澄達氏マハーバラータミーマナハ六・二〇三頁)。マヌ法典によれば「子はプト(Puta)と名づけられる地獄からその父を救済する、(Trigate) それ故に彼はスヴァムブー自らによつて(プトから救済者として)プトラ(Putra)と云はれたのである(マヌ九・三八・二五七頁)。かかる Putra (子)の字義分解によつてもわかる様に、印度に於ては古来継嗣なくして死んだものは悪処に墮すると云う信仰があり、斯くて前述の如くバラモン等再生族は梵行期を終つて家に帰り、結婚して子を生み、後嗣を定め、祖先の霊を慰め諸神を祭らねばならなかつたのである。

更にマヌ法典は「父母がその子を産むに際して受けた大きな苦痛は、よし百年を費すとも尚償ふことの出来ないものである」(マヌ二・二二七・四六頁)と規定している。更に「かれら両人(父母)の喜ぶべきことを常になすべく、アーチャルヤの所愛を一切時になすべきである。実にこれら三者が満足する時にこそ苦行から生ずる一切の果報を獲得するのである」(マヌ二・二三八・四七頁)「これら三者に対する敬順は最高の苦行であるといはれる。彼等の許可がなければ他の聖法を実習し

てはならぬ」(マヌ・三・三九・四七頁)。「これら三者を尊敬する人は一切の聖法を尊敬する人である。されどこれら三者を尊敬しない人はその一切の聖儀を無果とするものである」(マヌ・三・三三・四七頁)。「よし苦しめられる共アーチャールヤ、父母及び長兄は不敬視されてはならぬ。特にブラーフマナ族においては然り」(マヌ・二・二二五・四六頁)

父と母(及び時には長兄)に対する償は一生かかっても出来るものではない。常にかれら兩人の喜ぶべきことをなすべきである。然しここで注意すべきは、既に中村元氏によつて指適されているが如く、従来のバラモンの用語であるサンスクリット語に於ては、兩人(父母)と云う場合には、父(पितृ)の両数形(父二人)で両親の意味を表示していることである。このことはアーリアン人の父権制たる要素が充分に示されており、後に述べる妻の三従に示される如く、母は子よりは母として尊敬されても、夫(家長)には従属しなければならなかつたのである。ここに古代印度に於ける女性観の母として、妻としての三面性が見られる。マヌ法典に於ては、母と父とに於ては母の方が父よりも千倍優越していると云う。アーチャルヤはウパードヤーよりも十倍、父はアーチャールヤよりも百倍、されど母は父よりも千倍重く優越している」(マヌ・二・二五・三六頁)。更に「父は家主火であり、母は南火であり、師伝は供養火であると伝承せられた。これらの三火は最も尊重すべきものである」(マヌ・二・三三・四七頁)。これら三火を閑却しない者は家主となつた後も三界を征服するであらう。而も兄の肉身は天神の如く輝き天上に愉快するであらう」(マヌ・二・三三・四七頁)

婦人には理想の妻として、若くしては親に嫁しては夫に、老いては子に従うと云う婦人三従の道德が要求され、貞淑従順が妻の美德とされている。

「幼年には父に従属すべく、青年にはその手を執りし夫に、夫の死後はその子に従属する、婦女は決して独立することを得ない」(マヌ五・一四八・一三九頁)。「幼年と青年と老年とを問わず女子は何事をも独立になすことを得ない」(マヌ五・一四七・一三九頁)又「婦女は常に愉快に、家争の處理を賢明になし、家具の清浄に留意し、支出に於ては節約しなければならぬ」(マヌ五・一五〇・一三九頁)と規定している。

マヌ法典は一夫妻を理想とし、また夫婦の最高の法は生涯を通じての相互の信頼であるとされる。「他の男子によつて与えられた子は茲には合法的でない。また貞節なる妻に対しては何処にもオニの夫は規定されていない」(マヌ五・一六三・一四〇頁)。「死に至るまで相互に信頼を続けよう。それが夫妻に対する最高の法の綱要であると認めらるべきである」(マヌ九・一〇二・一五三頁)「結婚式を完了した夫妻は常に自分らが分離しないように相互の信頼を破らないように努力しなければならぬ」(マヌ九・一〇二・一五三頁)。

マヌ法典によれば、父の死後兄弟が同居する場合弟が長兄に対して、父に対すると同じ様に振舞うことを要求している。又父母の死亡後に於てその遺産相続は兄弟が分配することも出来、長兄のみが全財産を相続することも出来ると規定している。而して父即ち家長の生存中はその妻子及び奴隷等凡て無産である。「父がその諸子を護持した如く、長兄は諸弟を護持すべきであり、また諸弟は法に従つて恰も父に対する諸子の如く長兄に対して行動せねばならぬ」(マヌ九・一〇二・一五三頁)。「長兄は家族を繁栄せしめ、或は破滅せしめる。長兄は世間に於て最も尊敬せらるべく、善人によつて非難されてはならぬ」(マヌ九・一〇九・一五三頁)。「父母の死亡後兄弟は相集まつて父の財産及び母の財産を平等に分配することが出来る」(マヌ九・一〇四・一五三頁)。「或は長兄だけが

父の財産を全部相続し、残余のものは恰も父の下でした如くかれの下で生活せしめることも出来る」(マヌ九一〇五・二五三頁)。「妻子及び奴隷、これ等の三者は無産であるといはれる、彼等が得る財産はかれらの属する人のために所得せられたものである」(マヌ八四六・三三八頁)。長兄がもし弟の保護と教育とを怠る場合には、彼は父の代理人としての資格を失つて、伯父もしくはその他の親族に対すると同じ程度の尊敬を与えられるだけであり、又父が懲戒のために自由に子を打つことが出来るのに反して、長兄はたゞ毒行と傷害の罪を犯した弟を打つことを許されずに過ぎない」(マヌ九二〇・二五四頁)

以上述べて来た如く、アーリアン人は次第にドラヴィタ等の原住民を圧倒し、父を家父長とする大家族生活を営み、祖先崇拜がその家族倫理の中枢を支配するに至つた。やがてガンジス河地方に移住した彼等は村落共同体を形成し、バラモンを中心とした氏族制農村社会を形成したのであるが、次第にバラモン教の勢力が増大し、形成化し、家族制度は全くバラモン教の法の下に左右されるに至つたのである。ここに仏教興起の幾多の契機をはらんでいるのである。

成尋の参天台五台山記

吉 高 秀 靜

成尋の参天台五台山記を通して彼の都に於ける活躍等を見たのである。参天台五台山記は字の如く天台、五台の霊地巡礼を志し日本を発ち支那に渡つたの日記である。日記であるから色